



第9章 地域連携研究

木村, 修二
河野, 未央
坂江, 渉

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 7(平成20年度事業報告書):38-39

(Issue Date)

2009-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002053>



図書館が所蔵するの多数の「地域資料」の全容解明をめざしている。

そこで附属図書館関係者と地域連携センター、および海港都市研究センターの関係者が、平成20年（2008）年7月に一堂に会して懇談会を開き、今後、図書館と人文学研究科各センターとの間で、さまざまな分野で今まで以上の連携を深めていくことが確認された。

具体的には、震災文庫の活用や海港都市アーカイブス事業をめぐる連携強化のほか、所蔵歴史資料、古文書の共同調査・活用事業の推進等が合意され、その後開かれた断続的な会合を経て、基本的に来年度から「神戸大学附属図書館所蔵地域史料調査事業」を開始させることになった。

なお連携強化の一環として、今年度の夏に開かれた「地域歴史遺産保全活用演習」の事前講義と本演習（古文書合宿）に附属図書館の職員の方が初めて参加された。（文責・坂江渉）

第9章 地域連携研究

年報『LINK』発行へむけて

当センターでは、これまで毎年度末に発行される事業報告書を作成（第6号まで発行）してきたが、各研究員の調査・研究成果を公表する場としてはなかなか位置づけることはできなかった。そこで、本年度当初より研究紀要の発行へ向けて協議を始めることとなった。編集にあたっては原則としてセンター関係者全員で構成されるミーティングとは別の協議体（編集委員会）を組織して進めることになった。正式の発足までには、まず人文学研究科の教授会による了承を受ける必要があったため、正式の編集委員会会合までは準備会として2回ほど会を重ね、編集委員会の体制や紀要体裁、内容のラフプラン等が話し合われた。編集委員会は基本的にセンター関係者で構成されるが、人文学研究科を冠して発行されることも考慮して、1名はセンター外からも編集委員を迎えることになった。その結果、編集委員として、奥村教授（編集委員長）、市沢准教授、坂江講師（以上担当教員）、木村（渉外庶務担当）、村井（編

集担当）、松下、そしてセンター外から人文学研究科文化財学担当の藤田裕嗣教授に加わっていただき、構成されることになった。本誌のタイトルをめぐってはさまざまな意見が出たが結局『LINK』が選ばれた。これは、「連携」からの連想で「つながり」や「連結」などを意味する英単語LINKが採用されたものである。創刊号は準備の都合もあるため今年度内発行は断念し、平成21年度の7～8月発行を目指すこととなった。編集委員会会合はおよそ月1回のペースで開かれ、21年2月までに5回開催している。

『LINK』創刊号では、特集を組んで学の内外より寄稿を依頼することとなった。協議の結果、テーマは「大学は地域の歴史文化にどうかかわるのか—地域連携の成果と課題—」に決定した。特集趣旨説明文は奥村教授が執筆し、内外から6名の執筆者に要請していずれも承諾を得た。また『LINK』の誌面は研究員を中心とする成果発表の場とするねらいが当初からあるので、論考のスペースを大きく取ることになっている。また、必要に応じて資料紹介なども掲載することとしたが、時評や書評などさまざまな論評を掲載できるスペースを設けることにした。さらに、センターの活動報告書に代わるスペースを確保することにしたが、本誌があくまで読み物となることを考慮し、報告形式ではなく、各事業のなかからトピックなどを選んでエッセイに仕立てて掲載してゆくこととなった。なお創刊号については、当センターが取り組んでいる各事業を紹介するように構成されることになっている。

以上まことに雑ばくながら、年報『LINK』編集のこれまでの経過を概観してきた。まだ完成をみていない新たな取り組みだが、今後当センターの軸となるようなものに本誌がなってくれることを期待したい。（文責・木村修二）

神戸大学近世地域史研究会

神戸大学近世地域史研究会は、『播磨新宮町史』編纂事業の継続事業として平成17年度より発足、本年度で4年目を迎えた。ほぼ毎月1回の開催ペース、「たんなる『古文書を読む会』ではなく、『研究会』として運営していく」という方針は発足当時のまま、固く守られている。ちなみに

本年度の開催実績は以下の通りである。

2008年5月25日、6月22日、7月21日、9月28日、10月26日、11月23日、12月21日、2009年1月18日、2月15日、3月20日。時間は、いずれも13:30～16:30。



本年度は、特に研究会報告の内容、あるいはその後の討論のあり方などから、報告・議論の質の向上を感じることがしばしばあった。その要因としては、学生・院生の継続的な参加、そして積極的な発言が得られたことが大きい。市民の方々の報告や発言に対して「史料の拡大解釈をしてはいけない」など、厳しい発言を繰り返すような局面があったが、そのようなやりとりは、結果として、歴史「学」としての議論・報告のあり方など、大学教育の場においては自然と学び身につけていく学問の「作法」を一から説いていくことになったのだと思う。私なども同じことを伝えていたつもりだったが、やはり学生・院生の発言のインパクトの方が大きいようだ。

一方の学生・院生も、「歴史研究者の一員」として見なされることから、市民の方々から様々な質問が向けられるようになった。それに彼らが答えられないこともしばしばあるが、しかしそれは時に、単に彼らの知識が無くて答えられないのではなく、日本史「学」としても解明できていないような、本質を突いた問題であることもある。だからこそ、参加している学生・院生・研究者が束になってやり込められたりもする。和気藹々とした雰囲気の中にありながら、学問的緊張が維持できる。研究会の場が少しずつだが変わりつつある。コーディネートする立場としては、来年度もこうした研究会としての成長を見守っていきたいと考えている。

なお、「地元への研究成果の還元」という点では、いくつかの案はあったものの、本年度は全く着手できなかった。研究会発足当初からの大きな課題でもあり、来年度はその実現を目指したい。（文責・河野未央）

播磨国風土記研究会の調査研究

地域連携センターと新宮町との共同研究事業『播磨新宮町史』史料編Ⅰの古代史料の編纂に関わったメンバーが立ち上げた研究会、播磨国風土記研究会は、今年度も一定の研究調査活動をつづけた。とくに一昨年（2008年）の4月以降、平成19年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究」（課題番号19520571、研究代表者坂江渉）の助成をうけ、主に旧揖保郡と旧宍粟郡を中心とする基礎的な研究調査をおこなってきた。

とくに今年度は、昨年度、「発見」「確認」された山口県小郡文化資料館蔵の「秦益人刻書石」（仮称）に対する継続的調査研究をおこない、その調査結果を平成21年2月24日（神戸市）、2月26日（山口市）の両日、記者発表の形で公表した。

記者発表要旨は、次の通りである。／石板は将棋の駒状に加工（高さ23cm、幅16cm、厚さ3cm、重さ2.7キロ）／書風等から石板上の文字は奈良時代中頃に書かれたもの／表面に「飴磨郡因達郷秦益人石」と書かれ、裏面は「此石者人□□□石在」などの文字を確認できる／山口県内で初めて確認された古代の石文であり、かつ兵庫県西部における渡来人氏族、秦氏の活動を示す最古の実物資料である／石碑などとは異なり、個人が携行する石製品に文字を刻んだ特徴的な資料であること／古代の播磨国と周防国に交流が存在したことが明らかになったこと／。

発表後の新聞各紙では大きく取り上げるものもあり、毎日新聞の2009年2月27日（金）朝刊では一面掲載され、石板の写真とともに「石板持って姫路→山口／奈良時代・初確認」などと報道された。またこれに先立ち、2009年2月13日～14日には、宍粟市歴史資料館で科研分担者会議を開き、メンバー相互の共同研究発表をおこない、宍粟市内と佐用町内の巡見調査も実施した。（文責・坂江渉）